

618

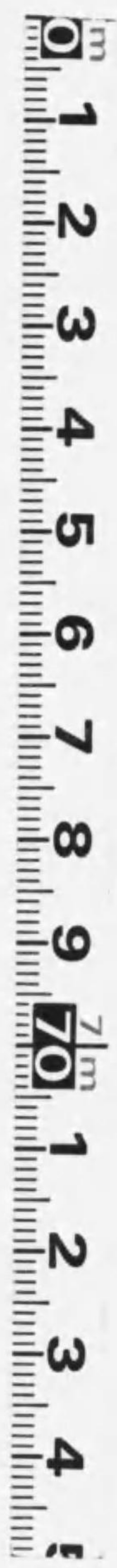
納本

特 241

2/8

日本神話の考察

3
2



始



特218
218

緒言

さきに高千穂顯彰のことが、單なる場所の問題にあらず、實に現代日本人の肇國精神に復古する重大事業であると感じました。而して其實を擧ぐるには、日本神話の精神を明らかにすることの緊要なることを悟り、不肖乍ら之に關する書見に努めて諸先生の教を求め、併せて思索を練ることに努力して其結果をまとめたものが本文で、私の反省であります。固より淺學の身を以て其中途に於て、過ち多きことを愧つるのであります。けれ共、此上は諸賢の御指導を仰きて過を正し、且つは自己の修養にあていたと存し、敢て拙筆を草して公開する次第であります。幸いに御同情御助言を得は幸せ之に過さざる處であります。尙 本稿に關し重要な點に就き、特に渡邊八郎先生の御教示を得たことは、私の尤も幸福とする處にして、茲に同先生に對する感謝の意を表します。

昭和十二年八月

甲斐勝



日本神話の考察

(一) 序論

日本民族の特徴は祖先崇拝と共に天地の萬物に對し感謝の念を持つ處にある。故に祖先の御靈に對しては神として尊敬を拂ひ偉人大聖に對しても死後神として其徳に倣はむことを希ひ天地の自然に向つては月星地球太陽乃至地水風火何れにも其恵みに對して神の働き給ふ處となして之を崇拝するものである。故に八百萬神と共に総ての上に全一たり給ふ處の天御中主神を見奉る。而して直接其御姿として拜する處は神々の内で最高主宰神たる天照大神であらせられ、之を以て、太陽のよく萬物を慈育し永遠に變らざる平和の姿に象ざり且つ女神として拜し奉る。

即ち宇宙は無始より無終に向つて空漠たる大空の中に秩序整然たる時々刻々の活動であつて、之を宇宙の靈の現はれと見ると共に其報恩感謝の念が惟神の道となつてそこに獨特の理想信仰が發露せられたもので、其最初の信仰は實に純真なる萬物及祖先に

對する謝恩崇拜から出發せるものとする。即ち天の岩戸開きは八百萬神が神集ひ給ひて笑の裡に清明の世界が生れるとの信仰を物語つて居る。然るに後世に及びて外國の歴世思想から生れたる小乗教の輸入せらるゝ處となつて迷信が起つて來た。勿論其反面には大乘佛教の如き日本に於いて寧ろ盛になつたものもあるけれども下層階級に迷信思想が滲透する處大で更に又近代に於いて科學の進歩と共に物質文明の勃興が進化論によつて吾等の周囲を唯物視するに至らしめ個人主義を鼓吹せる結果日本民族の神に對する觀念を損したるものと思ふ。故に其建前から日本神話に荒唐無稽とのそしりが放たれたるも無理からぬ處で外國思想には到底解し得られざる處とする。

斯く後世に及びて迷信が國民の間に大勢をなしたことは日本民族の信念の龜裂であつて日本精神を大に過つたものと言はねばならぬ。兎に角神話は吾等の祖先が永い間の生活の上にあらはれたる天地の恩恵に對する信仰記述であるが天地開闢は無限の昔に始まつたこと勿論で天地生成の後に人類の生活と共に自然に生れ來た信仰が民族意識の確立をなし、日向の高千穂に天孫の降臨せられたるによつて此地上に一大劃期の偉業をなされたものと解する。故に天孫降臨のことは民族發展の過程中に於ける肇國の宜命であり日本最初の偉業であると見奉るのである。佛教に於ける阿彌陀如來は四十八願を成就して西方十萬億土に極樂を建設せられたるが、吾等の神祖は惟神の道を樹

立して此地上に日本樂土を建設し給ひ今日此儘の生活の上に平和を誓ひ給はれたるものであるが故に吾等は此道に専念追ひ進みて東方日神を崇拜し皇統一本に歸一し彌々臣民相互の大調和を實現して國威の彌榮を希はねばならぬ。

茲に日本神話の天地創成より天孫降臨迄の内容は宗教的信仰が本質をなし道德的實踐によつて具體的に把握し得べく又哲學的思索に基礎づけることが出来る。

神話の中に現はれたる神々の二神相並んであらはれ給ふは、むすびの作用の展開を司り給ふ處に男女双神が立たれ、又獨り神は實在の認識の上に生れ給ふ神で昔も今も其存在に變りのない實在に對し見奉る神にまします如くである。次に神々は吾々の内省の上に現はれ給ふのであつて、天御中主神を内省の出發點に拜し奉る神とする。

故に神を崇拜するといふことは、即ち自己内省を基調とすべきことであつて、自己といふ城廓の外に對立的に神を見るのであつては眞に敬神の實を擧ぐる所以とはならぬ天照大神の天孫に給はりたる御神勅に『此鏡を見ること己れを見る如くせよ』と仰せられたることは吾々臣民に對しても同様に仰せ下されたることと拜承せねばならぬ。即ち吾々が鏡を見るととき其鏡に映するものは自分の姿である。

然し乍ら自己の外的美醜を見るものでなく内心の内省の深甚なる奥底に天地に只一の眞理として萬人の飯趨すべきまことを見出す。即ちそれが天照大神であつて宇宙たる

御中主神を背負ふて立ち給ふ神である。天照大神を自己の心の中に拜し神に融合したるとき自分の本當の魂を體得するのである。

かくて吾等の祖先は神話によつて眞に重大なる教訓を垂れ給ふたのであつて神話の考察に一步を進めて人生の龜鑑とせば日常實踐の規準とする處實に大である。

思ふに日本神話は民族信仰の傳統を表現したる記述と見られるのであるが其民族の特長とする處が①純眞なること②雄大なること、此二大要綱は日本國土の地理的環境から生れたる處とする。

即ち豊葦原瑞穗國は四面海を以て繞らした長い島國の中央に河川の分水嶺となる處の山脈が蜿蜒起伏して居る、故に海と山との交渉密接にして風雨共に宜敷を得、山には樹木よく榮かへ野には五穀豊穰の天恵あり、魚貝の恩恵にも亦間近く接することが出來た其調和の中に生活したる民族の個性の上に自づと天地の調和を表現したことは神乍らなることであり、此島國に一度足を止めたならば海外の出入りといふものなく、皆此環境の内に理想を同ふする處の民族の家族的團結を形成したのである。されば天道に即して神を崇敬し君主に皈一して世界の平和を目的とし中庸を尊び差別を撤廢して萬物同胞の理想實現に努力するのが惟神の道である。

教育勅語に『之を古今に通して謬らさず之を中外に施してもとらさず』と仰せられたる處である。其實現の基調とする處は個人主義を排して民族意識を確立し愈々皇室の彌榮を希ふことである。然し民族主義に止まつては廣義の利己主義たるの嫌があるから其極致は天地に融合する理想であらねばならぬ、かくて日本獨特の神道なる故に佛教基督教乃至儒教の如きを排斥せねばならぬ様な排他的のものでない。即ちあらゆる方面に於て抱擁する大さを持つたものであるから神話の内には夫々部分的である處の哲學宗教に共通する點を持つて矛盾する處は更にある可くもない。故に一面を見て神話を佛教か生みたるものとするのも乃至儒教が生みたるものとするのも我田引水である。恰も群盲が巨象を捉へて批判するの小智に類するものである。

尙惟神の道に流れて居る處の中心精神が實踐窮行にある。又實在の確認に立脚したる垂訓であり迷想的部分や妥協的部分を含まぬ點から云ふと全體的である處の理想信仰として他の宗教と比較すへき大さのものでないと云ふことを確信する。

(二) 本論

さて神話を考察の順序として天地開闢より自己に至る迄の關係を思惟する。先づ最初

に天地と共に成ませる天御中主神あり。次に天常立神、國常立神、諸冊二神、天照大神、八百萬神各々の自分といふ順序に考へるとき御中主神の一元に始り恰も扇の要より末廣に擴大せる現在の周圍は實に彌榮の形相であつて將來に向つて亦永遠の約束を持つて居る。其中に自己の一點を發見するとき自己は一ケの獨立存在であるけれども又一部分にしか相當しない。然し乍ら其全體に融合する自覺に立てば部分即全體の理を悟る事が出来る。そこで考察の順を逆にして大我を出發點として御中主神迄逆上れば自己の胞中に御中主神を擁し奉る事が出来る。

即ち教育勅語に『朕惟ふに』と仰せ出されたる大御心を併せて伺ひ奉る次第である。茲に始めて神話の信解を追ひ進む事を得るかと思はれる。天御中主神は宇宙と共に成りませる神である現象は神の働らきてあつてもし神が宇宙より先に出て宇宙の外にあつて天地を創造されたるものとすれば宇宙は有現的無限でなければならぬ。斯の如き觀念より生れたる神は人間の造つた神である故に神と人とはどこ迄も排斥し神人合一の境地に達する事は出来ぬ又神の全愛に抱かれる事は出事ないことと幕一重の恐怖を感せねばならぬ。

日本の神様は吾々を抱擁されて居る處の有難い神様である。かく宇宙の始は吾等の信念の上に成立つて陰れ身の神様であらせられる。而して信念の世界から現實の世界に

交渉を推し進めて見れば、現實界は無始より無終の變化である。現實界は實に生成發展であつて神自身の彌々神たる事の實現を目的とせられたる彌榮の精神に満ちたるものである。この生成發展を産靈(ムスビ)の作用と云ひ其働きの陰陽兩面より見たとき高産靈神、神産靈神と稱名し、御中主神と共に三神一體として之を造化三神といふ。但し造化は無より有を生ずる意味に非ずして有全量に於ける調和の變態である。

茲に産靈の働きは陰陽の兩面に相違ないけれ共其精神に於て彌榮の表現で神の御心である故に和合を以て基調となし其結果は和合より和合への變形である。同様に日本は和の國であつて世界の平和を目的とする指導國として大の字を冠して大和國と稱し日本精神を大和心といふ。世界の歴史の變遷から考へると平和の外貌はあつても精神に於ては妥協あり、征服あり、眞に和合の精神は日本にのみ神乍らにして發見し得られるものとする。即高産靈神の働らき掛け給ふ處に對し之を心から迎へ消極的なる誘引を以て和合を作り給ふ働きが神産靈神である。諸冊二神の國産みの御精神も此如き産靈の心持ちを以てなされるのである。此心持を『いざなの精神』といひ、いざ、さあ、それつ、と云つた様に其内に躍動的氣分を含んだものである。

次に宇宙は吾等の認識の範圍が有限であり、其外方に無限の世界がある即ち思想の世界である。斯く有限對無限の區分が成立つ。そこで無限を司り給ふ神を天常立神とい

ひ、有限を司り給ふ神を國常立神といふ。天常立神より有限無限を更に超越し給ふ無限の御中主神に歸入合一の自覺に導き給ふ神をウマシアシカビヒコヂ神といひ、國常立神より愈々現實界に導き給ふ神を豊雲野神といふ。以上は現實界を超越されたる天地初發の神々にして何れも單獨穩れ身の神にあらせられる。次いで十柱の神が夫々男女の双柱として五組に別れ現れ給ふのである。

① ウイヂニ神、スイヂニ神

② ツヌグノ神、イタグイ神

③ オートノジ神、オートノベ神

④ オモダル神、アヤカシコネ神

⑤ イザナギ神、イザナミ神（諾冊二神）

- ① は矛盾反對を司り給ふ神
 - ② は更に物を生かし造り遊ばす神
 - ③ は更に出來上りたる事物を擴大豊富にする神
 - ④ は圓滿完全にあらゆる方面に備はらせ給ふ神
 - ⑤ は國産み神産みの神
- 以上①より④の神々の御働きは思想界から現實界に追ひ進む過程に於ける彌榮の精

の發現する順序である。之を自分の精神の働きと比較して解するとき、四段に分けることが出する。

① 現實界を見たまゝの形は矛盾反對に満ちたものである。即ち感受の作用といふ。

② 次に之を心の内に確かと留め置いて何時でも應用の効く様に之を活かす、即ち思想する作用といふ。

③ 次は行ひの上にはあらはれる迄に色々の工夫をなして豊富擴大する、即ち意志の作用といふ。

④ 次は善惡の區別を立て一種の決定を與へて行ひの上に命令の作用をなす。即ち心の本源たる魂である。

以上が吾々心の四段の作用としたものである。次に諾冊二神の國産みは愈々現實界に於ける物の生成發展であつて物産みのお働らきてある。佛教では以上を二大別して物心の二相となして居るが、吾々が内省の結果心の働きを神より授けられて居る事は同様に其働きを司り給ふ神の存在し給ふ處であるを解する。而して其産靈の作用から陰陽の双神に見奉るのである。次に⑤の諾冊二神より始めて物の世界が展開する。そこで現實界の現状から遠い昔に逆上つて天地生成の順序を哲學的に考察して宇宙は星雲時代に始まり渾沌たる高熱瓦斯の立ちこもつた中に只神の御働らきのみありて宇

宙が變化する状態を想像する。瓦斯はやがて凝結し來り渦巻き作用を始める、次に熔融体に近くなり廻轉運動を始める。夫々の分子間には一種の引力が働いて凝集してゐるか其引力は迴轉運動と共に求心力と遠心力が平衡して居る、但此二力は別々に存在する力でなくして陰陽の兩面より見たる別名である、今求心力を司る神を諾神とすれば遠心力は冊神の司り給ふ處である。此平衡状態は冷却か進んで質量が大となれば平衡が破れて飛び去つて行くか、夫々の位置を得て安定すれば、分裂作用が止つて冷却作用のみ進行する、分裂も産靈の働らきである。而して人間に尤も關係の深い太陽系に就いて考ふれば太陽の周りに遊星の運行があり、太陽のみがもこの姿のままに輝きを保ちて運行の中心をなしてゐるのに遊星は次第に冷却体となつて現在の状態に推移してゐる。此國産みは二神の最初の御事業であるが然し乍ら二神は現實界の生命となり給ふ神で、今日も尙萬物の上へての現象が産靈の働らきとしてあらはれてゐる處である。さて國産みの始めに當つて淡島、蛭子島の如き固まりのない御子は舟に托して流されるのであるが、之は分裂作用の始めに流星となつて行方不明となり姿を止めないことを示されたものであるか、或は大八島などの關係から推せば、一端出來た島が砂丘の如きもので、やかて地變の爲に海中に没し去つたことを示されたものか、二様に解される。同様の解釋から大八島といふのも、日本國土を指した狹義のものでなくて恒星群

と見ても差支へないし又世界の大洲國と解すること出来る。以上の如く二神の國産みが一應片付いて主として地球上の状態に移り部分的に見別けて六種の陸の神を生み給ふ、是からが二神の神生みとなるので宇宙を精神的に見て八百萬神の現はれ給ふ基をなすのである。即ち二神は人間に先づ物の世界を與へ給ひ、次に神の世界を悟らしめ給ふのである。そこで海港風木山野の諸神を生み給ふ。茲に海木山野は實在の認識の對象となるものであるから、獨り神であらせられるが、風の神は活動状態によつてわかるのであるから男女双神に見てある。又港は單に灣形を指したものでなく、舟の出入を意味したもので港神も男女二神に見てある。神生みの最後に火の神加俱土を生み給ふ。此時冊神は非常の苦しみにて遂に病氣となり給ひ、其爲めに隠れ給ふ處となつた。即ち冊神の神産みは火の神を以て最終とする。そこで諾神は大いに怒り給ひ十束の劍を以て火の神を三ツの部分に切り別けて成敗し給ふた。即ち火の神の活動が止む次第であるから火山の鳴動も次第にやはらぎ死火山となる。然し之は科學的なる解釋に依るべきことでなく荒魂を諭されたものである。即ち人間の持前である所の反省なき勇氣、血氣の勇、蠻勇を戒められてゐる。ならぬ勘忍するが勘忍といふ。此勘忍の奥に固持せるものか眞勇である。之を荒魂といふ。火の神を成敗されたことは心の情敵を殺すことの訓へと解する。吾等が反省自重の上持つべき勇氣は荒魂であることを悟らして

戴く。茲に冊神の臨終に於て女神の口より吐かれたる穢い返吐の中にポツリポツリと二柱の夫婦の神が生れ給ふ。金山彦、金山姫といふ。此二神は後に鑛山を支配されますが銅鐵の如き鑛山は火山系の山に産出するもので火の神の死后火成岩の地層中に採掘される譯である。次に冊神の苦しみの排泄物から埴安彦、埴安姫の男女二神が生れ給ふて後に肥料の神様とされますが排泄物も神の司り給ふ處で貴重なる材料である。さて諾神の十束の劍より滴る血汐の中より八柱の武勇の神が出て給ふ。中にも建御雷神は後に天孫降臨に際して大功を奏せられます。さて女神の行かれる處は黄泉の國である。即ち天に光明の世界を拜み地に物質の世界を握る處の人間が物質の世界に執着することは煩悶の始めであり罪惡のもことなるものである。茲に此二ツの世界は各々獨立したものでなくして靈的に見たる宇宙の両面である。即ち穢れを知る心が同時に光明世界を知る所以のものとて諾神と冊神と別れ給ふたことか此兩面を光明の世界と闇黒の世界に見別けて、冊神の行かれる處を黄泉國としたのである。そこで諾神は冊神を見舞はれますけれども穢れが多いので高天原に飯られます。高天原は自覺の國であり光明の國であります、女神は黄泉國の端にある黄泉の比良阪迄逐ひ掛けられますけれども諾神は比良阪に千引岩といふ境界石を置いて永遠のお別れを誓はれた。即ち冊神は黄泉國の有様を御覽になつた諾神を恨らまれたのである、思ふに人間は自分の

悪いことはなる可く匿したいと云ふのが人情の常である、諫言は耳に逆ふ例への如く多くは反省することに努力せず、却つて相手を恨み、恩を仇て返へすといふことがある真に反省せねばならぬ事である。此情實の世界が黄泉國である。此心の裏面の見悪い状態を人間の死體の腐敗した姿に例をとつて諭されてあるのが冊神の逆襲の一條であります。そこで凡夫の世界と自覺の世界に境界があつて穢れの儘では神の國に行けないのである、茲に冊神はあなたの國の人間を毎日千人宛殺してやると恨みを言はれる諾神はそんなら一日に千五百人宛の子を産むと應酬せられた。人間が年々に増殖する基が茲に現はれて居る。

そこで諾神は日向の橘の小門の阿波岐原に行かれて黄泉國の汚れを清め給ふのである其時身に着けられた着物一切を取り拂ひ袂をせられます。そして上ツ瀬は早や過ぎ下ツ瀬は遅過ぎると申され、中ツ瀬をお選ひになります、これは人間の反省の態度を示されたもので一切の人間味から離れて神の心を頂き工夫せねばならぬ事である、そして中ツ瀬は極端なる主義主張を排して中庸の道を踏まねばならぬ事を反省さして貰ふ次第である。偏らざるを中といひ易らざるを庸といふとあり、宇宙の真理である處の日常人間の行ふ可き道として示されたる中道は神乍らであります。さて最初の穢れの中から八十曲津神、大曲津神が出られる。次に清淨の身となられて神直日神、大直日神が出

て給ふ。即ち善惡の相對を神乍らに示されたもので人間本來純なれども先づ個性としては性惡の衣を付けて成長する。それを反省によつて性善たるを得る故に、生れた儘の性善といふものはないのである。黄泉國の穢れを身に付けた吾等凡人には曲津神の導きで罪惡を間斷なく行ふて居る。然し其罪惡を反省して善行をなさしめ給ふのが、直日神である。次に顔を洗ひ給ふて左の眼から天照大神、右の眼から月讀命、鼻から素盞鳴命が生れ遊はされた。諾神はそれそれ統治の世界を定められて天照大神に高天原を月讀命に夜の世界を、素盞鳴命に人間世界を配置せられた。吾々反省によつて心の内に拜む處の光明世界はマコトの世界であつて太陽の絶大なる光輝の普く行き渉る如き世界を鑑みとするのである。そこで天照大神の御姿として太陽を信仰の目當てに拜するのてある。天照大神は諾神の和魂を以て本質とせられ太陽の如くに最高の光輝を備へ廣大無邊の仁慈を垂れ給ふ處、萬物は大神直接の御力によつて生きてゆくのである。月讀命は暗夜に曲津神の誘ふ處を照覽して直日神に依らしめ給ふ。素神は人間の世界を司り給ふのてるが、人間の心を全体的に脊負ふて立つて居られる。

此三神の生れ給ふ處が眼と鼻とあつて、頭部は魂の宿る處で、最も大切な處である。人間の身体の端々迄何れも不要の處はなく、何れの一個所を捉へても、全体を代表し得る部分即全体のものである。而して眼はものを言ふとし

た位に心を現はす重大使命を持つて居り、魂の第一關門である。天照大神が左の眼から生れ給ふ處から日本人は左(向つて右)を上位とすることになつてゐる。又鼻は吸氣の門戸で、生命の大切なる依り所であつて、眼と鼻とは光と空氣と絶体要素の取り入れ口である。人間が生れて或期間食物は取らなくとも寸時も間斷なく其恩惠に浴するものが光と空氣である。光は智惠のもとしてあり、空氣は肉體のもとして、人間としての現實を與へて戴く根本である。然し素神は人間の性質を代表せられたる点があり諾神より受けられた荒魂を本質とせられて居る。純情から吾儘の振舞をせられます。

扱て人間本來の本能として吾儘であり、頑固であり、父よりも母を慕ふのが自然であつて、素神も後に母神を慕ふて黄泉國に行くことの許しを諾神に乞はれます。吾々の誘惑に乗せられ易い傾向が示されてゐる。人間は生れて先づ純情であつて罪惡の世界を知らないから、小兒の純心より生れた亂暴は左程に咎むべきものでないけれども、餘り度を過すときは懲戒してやらねばならぬ。處が其純心は僅かの油斷から知らず知らずの間に反省なき吾儘に陥るのである。斯くて素神は母神を慕ふ餘りに徹底的に泣き給ふて青山を枯らし、海水を乾す如くに泣き給ふた。故に諾神も其純心に愛でて之を許し給ふた。然るに素神は姉神に一應の挨拶の爲めに高天原に參上りをなされます。之は人間の美點を發揮せられた處であるが、姉神は其荒魂を警戒されました。

そこで素神は和魂に立ち返つてゐることを證明するため、天安河原を隔てて(ウケヒ)の神産みを約束されます。茲に天安河原といふは大空を指したるものと解する。

(明治天皇御製)

○あさみどり 澄み渡りたる大空の ひろきを己かこころごもかな

天安河原は實に神聖なる處であります。そこで大神様は素神の十束の劍を三ツに折つて口に含んで吐き給へば、三柱の女神が生れ給ふ。次に素神は大神の曲玉を受取り口に嚙んで霧吹き給へば五柱の男神が生れ給ふ。即ち三柱の女神は素神の物さねより生れたる故に素神の御子であり、五柱の男神は大神の御子であります。此一條は天道と地道の融合を自覺の境地によつて得る天地人一体の訓へを下し給ふた處の神訓である。天道は神の命し給ふ道であり、地道は人間の完備すべき徳である。茲に五柱の男神と三柱の女神の各御名と其司り給ふ處を次の如く解する。

五柱の男神

- ① 天忍穗耳命 君 臣 の道
- ② 天穗日命 父 子 "
- ③ 天津彦根命 夫 婦 "
- ④ 活津彦根命 兄 弟 "

- ⑤ 熊野久須比命 朋 友 "

三柱の女神

- ① タギリヒメ命 智 の徳
- ② イチキシマ命 仁 "
- ③ タキツヒメ命 勇 "

之を五道三徳といふ。故に道の根源は高天原より出てたるもので、永久不變であり、徳は人間の修養によつて磨く可きもので、教育の力にまたぬばならぬ。茲に天道一位に君臣の道を明らかにせられてあつて、天忍穗耳命より天孫瓊々杵尊に及び、中ツ國に降り給ふて此國土を統へ給ふ處の君は其直系御一統に依られる事が御神勅のまゝに掟てたる事を拜承する。また三種の神器は智仁勇の三徳の表徴として皇位と共に代々繼がせ給ふ處も、斯く神の掟てとせられたる處である。

教育勅語には『爾臣民克く忠に克く孝に』と仰せられ、特に忠孝一致の訓へを垂れ給ひ更に『父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信し』と仰せられてある。又『智能を啓發し徳器を成就し常に國憲を重し國法に遵ひ一旦緩急あれば義勇公に奉し』と仰せられて、三徳を明らかにせられたる處である。

さて素神は神産みの結果其純心に任せて高天原に於て乱暴を働かれます。それから

間もなく大月姫神(豊受姫)といふ女神の處に行き御馳走を要求されます。此女神は食事のことを司る神でありまして、御自分の體の口や鼻や尻や、各孔になつた處から出た材料を以て食事を調理せられますと、素神は之を隙間見て、不潔だといふので大いに怒り、無慙にも大月姫を切り殺されました。之は人間の吾儘不心得を反省さして頂きます食物は皆人間の排泄物を肥料として作るものである。然るに肥料を不潔なものと思ふにして農業を卑賤な業と心得て居る。而して食物に對する感謝の念が薄い。食事を攝るにも人間の権利の如く考へてむさぼり喰らひ戴く氣持が欠けて居る。従つて無駄が多い。例へ金を出して買ったものにして其勢力と天恵を思ひ、食物に對する觀念を改めねばならぬことを教へられます。農業を賤んでは日本の國は立つて行かぬ。日本は農業本位の國であるのに斯くの如き間違つた考へを一般に持つて居ることを先づ改めねばならぬ。昔は士農工商と云ふて居た。然るに官尊民卑といふ様な思想を生む時代があつて、何時の間にか商工農といつた様に順位が逆になつた。何れも高下卑賤はない事であるが、商工業が文明の職業だと云ふ考へから、昔のまゝの言葉が通用せぬ事になつたのである。天地自然の偽りなき眞理を鑑みとして孜孜營々農業に營しむことを賤しむ處はない、神の心を戴くには尤も惠まれた日常の生活である。之を反省して少くも職業の卑賤を考へない丈けに改めねばならぬ事である。

さて大月姫神の死體より蠶や稻粟、小豆、麥、大豆等の種子が出来ました。故に五穀の神として豊受大神宮に祀られてあります。素神は尙も乱暴が甚しくなりました。即ち大神の白馬の皮を剝いで機織場に投げ入れたり、肥料を振り撒いたり、又田の畔をこわしたり、あらゆる亂暴をせられましたので、遂に大神は天の岩戸に隠れ給ふた。そこで世は暗黒と化して曲津神の跋扈する處となり、八百萬神は大いに困窮されたので、一同天安河原に集り大評定が開始されました。此時の座長は思兼命である。思兼命の智慧は神の智慧であり、光明の智慧であり、自覺者の大智慧であります。思兼命は岩戸開きの方法を案出されました、一同と共に準備をせられます。先づ石凝止命が鏡を作り、玉祖命が曲玉を作り、太玉命は天香久山より根ごしの眞神を取り來り、之に青白の幣をかけ、其中程に鏡と曲玉を付け、岩戸の前に奉持される。天兒屋根命は祝詞を奏上し、鈿女命が日蔭蔓を肩にかけ、正木蔓を髪に結び笹の葉を打ち振り、拍子面白く乱舞をなされます。満座はごつと笑ひ興する。其時大神は密かに岩戸を開けて隙見給ひ、何を騒いで居るかとお尋ねになります。鈿女命は『御尤も乍ら天岩戸の外にも大神のと同様の偉らい神様にお出ましを願ふて、何不自由く愉快に過して居ります、』と踊り乍らお答へすれば、大神は不思議な事と御顔を出し給ふ處を、兒屋根命と太玉命と鏡を前に差出させは鏡には大神御自身のお姿が映つて美しい女の神様が立つて居られます。そして

暫時其姿を見入つて居られる處を、手力男命が岩戸を取拂つて、大神の御手を取りお出ましを願ひます。其后には注連繩を張つて再ひお隠れ遊はさぬ様に締めきりました。そこで世は再ひもとの、のどかな平和の世界となつて、高天原も下界も一時に明るくなつた。神々は勿論、曉の長鳴鳥が喜び鳴きました。この天岩戸開きの一條は、其場面が誠に賑やかに論されてあつて、深甚なる端々の教訓を含んだものと窺はれるのである。が、要するに人間の生立に於て、まづ家庭に於ては父母より、長しては社會より、指導によつて道德の教育を受けるのである。然し自分の心が一人前に獨立して來ると社會の裏面を觀破する様になる。何時の間にか罪惡の世界を知つて人生の暗黒面に立ち入るのである。純心なるこれ迄の光明といふものは理想的のもので假想暗黒面に對する光明世界の憧憬に過ぎないことで、眞に力つよい信念といふものになつて居ない。故に自分の心の中から天照大神は姿をかくし給ふて、人生が暗黒となるのである。そこに反省が要求されて來る。人間の魂には罪惡を排斥する要求を持つて居り、光明の智慧が密かにほのめき來つて、やがて反省の結果が本當の光明世界に立ち返り、信念を確立するのである。本當の光明といふものは自分の心の内にある暗黒を充分反省することによつてのみ悟られるのである。世の中に自稱善人は數多い事であるが自ら目出度い人は何時迄經つても反省の要求か起らないから、斯くの如き人の光明は、恰も鍍金したる

如き皮相光明である。人生眞に要求する處は本質そのものの光明であらねばならぬ。月や星の輝きにあらずして、太陽の輝きの如くであらぬはならぬ。斯くの如き光明が天照大神のお光りであつて其内容はまことであり、和魂である。新聞の三面に現れる處巷間の噂に登る處、世の中にありとあらゆる罪惡を犯す可能性に充ちたものであつて、總ての罪惡の要素を蓄へて居るのである。自分は善人だと思ふても、周圍の事情、社會の無聲拘束によつて爲し得ない丈である、その辛ふして爲し得ないで居るのを安心して居る譯にはゆかぬ。小兒の純心は罪惡を知らざる故に惡もないが又善もない。其長するに及びて惡を知る故に、自つと善を要求して來る。眞に光明を要求する心は絶大な闇黒の認識より來るに外ならぬ。何も業々罪惡を犯して、體驗者の誇を以て善良に立ち歸ると云ふ意ではない。そんなことを考へたら精神異狀である。行爲するも行爲せるも、眞に闇黒を認めたとき、それが反撥の大きな動機である。自己心内の猛省が大切である。普通人情として吾醜惡と暗黒面を見ることは嫌なことであり、恐しくある。然し反省の爲めには之を逃避してはならぬ。逃げす恐れす自己の心の正體を鏡に映して見ることであつて、其闇黒面を凝視してそこに神の靈力によつて闇黒を見破つたとき其隙間より天照大神がお光を差して下さるのである。かくて人間の惱みに光明を見出すことは實に幸福である。人間が個人主義物質主義に終始したならば、此世は全く

暗黒の世界となり、自分の心が暗黒に蔽はれるのであつて、一日も平和な感謝の日暮しは出来ぬ。そこで自分の心に岩戸開きができたならば、其氣持は夜明けの氣分に等しく、元且に雞聲を聞く如き、たのしくさやけき感を受けるであらふ。

(明治天皇御製)

○さしのほる 朝日のことくさわやかに 持たまほしきは心なりけり
さて吾等日本に生れた臣民は 陛下の御稜威のもとに平和の生活を戴かして居る。之が人生幸福の根本である。世界何處に之に比すへき國土があるふか。此日本の建國の由來と神國の實在とを確認すれば、其幸福は何物にも替へ難き貴さであつて、之を日常生活の上に、朝夕反省することが大切である。反省によつて、祖先の恩恵を思ひ、國體の尊嚴を知り、天地の慈愛を悟れば注連繩を張つて心の光明を堅忍固持せねはならぬ。自己の幸福を犠牲にしても子孫を守護せねはならぬ場合もある。つまり自己に死んで國家に生きるのは偉人の業である。以上の如く天岩戸開きの有難き神話は、人間の反省と幸福とを論されたものと信解する。

さて、素神は八百萬神の評議の結果、ヒゲをむしられ爪を抜れて、高天原より下界に放逐された。罪に對する刑罰は神代に於て定められた處である。かくして素神は出雲國に下つて、手名槌、足名槌の老夫婦と其娘、櫛名田姫の處に巡り行き、高志の八岐の大蛇

を征伐して、叢雲劍を得て大神に献上される。即ち罪の償ひである。而して素神は櫛名田姫を娶つて國土を經營されます。高志といふは越前越後の方面で、出雲民族は常に多數の兇賊の襲撃に悩まされたが、出雲民族も武を以て之に備へ、遂に退治することができた。茲に出雲民族の非常なる努力がある。其後六代目の孫、大國主命に至つて大いに國土の經營に努力し、産業大に奮つて出雲民族の勢力をつくられます。それには非常なる苦心があつて、神産靈神の御子少名彥神が協力して助勢されてゐるが、大國主命は兎とワニ鮫の物語のある通り、性來人情に富んだ方で、其徳の然らしめたる點がある。尙八十神達のそねみを受けて、度々危難に遭遇し、大に修養を積まれる。又素神の娘スセリ姫を娶つて素神に仕へられますのに、素神は多大の難儀を持ちかけて人格の鍛練を要求されてゐる。其普大抵でない處の難行苦行が一國の王たる資格を得られたる處で、偶然なる國王でない。或時北海の濱邊にて海上より訪ねて來た、光の玉を受けて和魂を自覺し國王の資格を備へられた。

かくて國讓りの準備が整ふたのである。本來此國土は天照大神直系の君たるへき地であるが故に、高天原に於て大神は高産靈神と共同にて思兼命を座長に命し、八百萬神を集めて天忍穗耳命を下し給ふに就て、御前會議を開かれます。そこで、一應中ツ國の状況を調査せしむる必要があるので、第二の御子天穗日命を下し給ふたが、大國主命と心

を通して遂に復命がなかつた。よつて其子、天ヒナトリ命を使者に立てられたけれども父子共に大國主の温情によつて歸國することを忘れ、再び無効に終つた。父子の道は情に傾き易ことを示されてゐる。即ち吾國は忠孝一如の國であるけれども、其道に迷ふ時は『君に忠ならむと欲すれば孝ならず』と云ふ如き矛盾に撞着することを諭された處と解する。そこで高天原では天津國神の子、天若彦を使者に立てられますが、之も空しく經過して無効となつた。即ち若彦も全様に味方となつて、大國主の娘下照姫を妻として、却つて中ツ國の王にならんと企てた。よつて次の使者に鳴女の雉子が立つた若彦は其雉を射殺して謀反をなした。其時の天波々矢が高天原に達したので、若彦の反逆がさどられ、其飯し矢が若彦の胸に的中して、無慚な最後を遂げた。神代から臣下の反逆は神罰を蒙つて亡ひてゐる。高天原では更に會議を改められます。思兼命は最後の處置として、武力無双の建御雷神を使はされます。建御雷神は波の上に劍を立て其上に座つて大國主命に談判されます。即ち此事ならすんは、己れを眞二ツに切ると云ふ眞劍な態度である。即ち眞の勇氣は相手を直ちに切るといふのでなくて、自ら割腹するといふ態度だ、といふことを味はれます。大國主命には勿論異存のない處であつたが、其子事代主に世を譲つてあつたので、事代主に尋ねる様返答されます。そこで漁(スナトリ)に行つて居られた事代主命に談判すると、之も異存はなかつた。只事代主

の弟、建御名方神が荒ふる神で、不承知で抵抗したが、力及はず信州諏訪湖迄逃げ、此處で謝罪して許しを乞ふた。かくて國譲りの儀は無事解決したのである。建御雷神は其責任を果された。かくの如く國家の大任には眞勇を建前とせねはならぬ。茲に、國譲りは征服ではなくて、當然の歸結であつた。即ち天照大神は常に高産靈神に相談せられた。又大國主命は神産靈神の使はされた少名彦神と共に國土を建設された處で、國譲りはむすびの主旨に添ふたもので、神乍らなる出來事で、平和の裡に濟んだと思ふ。斯くて天穗忍耳命の長い年代の間に、祖先民族の自覺の生活が確立して、遂に天尊降臨の偉業が實現された。そこで天孫の日向の高千穂に降臨せられたとき、之を迎へたる中ツ國の神々は國ツ神であり、高天原に居ましたる神々を、天ツ神と稱へ奉るべきと思ふ。されば神武天皇の大和國に於て即位されたことを以て、日本の建國と申し奉るに對して、天孫降臨を以て日本の肇國と申すへき一大偉業と信する。日向の高千穂は以上の考察よりして、其地名は日本歴史の上に最も大切なる名稱であり地理的には皇國の淵源として、重大意義を持つものであつて、日本民族信仰の中心地たるべく、吾國の海外發展と共に、愈々光輝を發すべきであり、民族意識反省の聖地として、名實共に顯彰せねはならぬ。茲に教育勅語の始めに、『吾皇祖宗』と仰せ出されあるのは即ち其國ツ神天ツ神である。然し神の御名によつて、其區分をはつきり立

てゐることは出来ないことであるが、それ程古い昔に端を發したる點に、尊い處がある。天照大神より神武天皇迄百七十九萬數千年とされてあつて、天孫降臨より神武天皇迄でも相當長い年代と見ねはならぬ。天孫降臨以前の年代はとても想像の出來ぬことであつて、其永い永い年代の間に日本獨特の神の心が作り固められたことは、神乍らと申すへきことで、西洋の民約的國家に比して一段の光輝を窺ひ奉ることが出来る。尙神話の上に現はれた動物の主なるものが馬、鶏、百足、雉子、雀、兔、ワニ、鮫の如きもので象、虎、ラクダ、キリンの如き外國の動物が登場してゐないことは、神話が日本に於て、自然に確立したるものであることを證明するものにして、全く日本独自の異彩である。さて天孫降臨以後の神々の男女二神は、御夫婦の關係を明らかにされた處であるが、其以前に於ける神々は、史實としての記述と見るべきではない。故に其記述の順序に多少の矛盾の處もある。然れ共神祖の御遺訓として見るとき、信仰の上には少しも差支へなきことであるが故に、日本神話は時間の觀念を去つて、反省の垂訓として一幕の内に見奉るべき事柄である。故に之等の神々は同時的存在であり、昔も今も變りなく吾等の周圍にありて、時々刻々に吾等を守護してゐられることを固く信する。そこで天孫天降りといふことは天地人一體融合の神業であると解する。よつて天孫天降りをして民族移動説より解釋せむとすれば、無理を生ずる處多く、然も國體の尊嚴を顧みさ

る所以ではなきや。日本民族には此理想信仰の確立することによつて、臣民は愈々天皇に歸一し奉ることにより、愈々天皇の御凌威が輝き、中ツ國の彌榮を強調し給ふのである。即ち天皇と臣民との關係は、權利義務の對立的のものでなく、一體のものであり、日本といふ圓板を其中心に於て一本の糸で吊されたる形で、其圓板の上には日本人といふみ國たからの米が一面に盛られてあつて、其中心を提げてゐる糸が皇統である。其糸の支持點は無限の上方にあつて、御中主神に始まり、其中途には天照大神の位置があり、瓊々杵尊の位置があり、以下神武天皇に次いで歴代天皇が彌繼々に其場所場所に就かせられてゐる。其將來は一寸一寸に糸が延びて行き、米の量は一粒一粒に増殖して行く。全く天地と共に窮りなく彌榮ゆる無限の皇國生命である。げに皇統は一本に代表されてゐる。然も糸と米とは同時同存である。此糸が切れても全部の生命が失はれるし、中心が片寄つても生命を危くする、全く絶對的の形態である。此國体原理が肇國精神であり、日本精神であり、教育勅語に仰せられたる億兆心を一にする精神である。吾々は此原理の確認が信仰となつて、お米相互は何處迄も同質共存、相互扶助でなければならぬ。物質主義や共產主義の如き人民勝手に、人爲の創造を企圖することは、恰も満員の川舟の中で、各自が勝手に跳ね廻る如きもので危険千萬である。日本人が外國の思想を摸倣すること、似て非なる不敬思想に墮落することは、お米の腐敗を來たす所以

で、み國室の價值が無くなる。吾々相互の間には、此腐敗を防ぐべく、若し發生せるときは宜敷く膺懲朴滅を謀らねばならぬ。生を日本に受けたる吾々今日の幸福は、同時に將來の制約であつて、過去現在未來に涉り、三界は一體の彌榮たることを信する。

(明治天皇御製)

- 桎の實の一つ心に萬つ民守るかうれし葦原の國
- 國民は一つ心に守りけり遠つ御祖の神の訓へを
- 天照らす神のみ光ありてこそわか日の本はくもらさりけれ

(三) 結 論

宇宙の活動は實に規則正しき運行であつて、毎日晝夜が交代し、四季の變遷を繰り返へし乍ら循環してゐる。神代の昔より今日迄その運行に間違ひがない。かつてハレーの慧星が明治四十三年に現れるといふ豫言のあつたとき、地球は慧星と衝突して世界は破壊するといふ噂が立つて、世界的に非常なる恐怖を感せしめた。この慧星は七十五年目に現はれる星で、長い尾を曳いてゐる故に、其一部に觸れて地球が破滅するかも知れぬといふ心配があつた。その慧星は他の遊星と違つた、楕圓の軌道によつて運行し

太陽と地球の間を通過するとき最も接近する星である。然し其運行には昔の儘に間違ひがなかつた。故に地球は衝突を免れたのである。尙又太陽を中心として多くの遊星が天空に動いて居るが、何物にも支へられない、全く空中の大樓閣である。人間より見れば實に不思議と云ふの外はない。人間は只地球の上に安定を得てゐるに過ぎないことであるから、地球と生命を共にしたものであつて、宇宙の安全が人間の安心の前提的のものであり、そこに絶体歸依の偉大なる力を感せしめられる。尙又五十年の人生が各個にとつて一期限であることを、皆よ、承知し乍ら、日々の安全を期待し得ることは何としても吾人の幸福と申す可きであらふ。之即ち人生の基本であつて傳統的に民族生命の永遠性を確信してゐる爲めである。此民族生命が神の生命であつて、神の理想のもとに神の支配し給ふ處とする。此宇宙の神を天御中主神と稱名し奉るのである以上は宇宙觀の大きな方面より人間の中心に向つて考察したる處である。

次に人間の内部から外方に向つて考へて見る。茲にお互自分と云ふものの獨立存在は確かな自覺である。人が故なく足を踏んだり打つたりするならば立腹する。即ち肉體を代表して何處かに自分といふものがある。又人が名を呼へは其方に振り向く、人に悪口を言はるれば憤慨し、賞められるは嬉しく思ふ。即ち心を代表して何處かに自分といふものがある。

斯く肉體が表現となり之を心が認識した處に自分といふものの自覺が成立つ様である故に自分といふものは肉體に精神の備つたときの概念であつて之を人格といふ。けれども、斯の如き主觀的のものだけが人格でもない。客觀的にも確立して居らねばならぬ例へば睡眠中は自分といふものの自覺はないけれども、人から侮辱を受けたとき、之を第三者が認めて呉れる。自分もそれを後に知つたとき憤慨する。同様に赤ん坊にも客觀的には人格を備へたものとせねばならぬ。そうしたならば人格とは一つの不思議な存在である。斯くして自分といふものが不思議なものである如く、神といふものも靈的のものである。故に眞實自分が分れば、同時に神も分る筈のものであり、自分と神とはものの全体と中心との關係ではないかと考へられる。肉體を表現として、自分といふものを認めるならば宇宙の現象を通して神を見る可きである。そこで神人合一といふことは神即人である。宇宙を全一として見たとき御中主神であらせられ、宇宙の中心を捉へたとき自分を認め得られる關係だと解する。故に一方が分つて他方のみに分らぬといふことはない。坊主が憎けりや袈裟迄といふことがある。つまり自己の擴張である。更に他國に出てて故郷を偲ひ、外遊して祖國を思ふといふこと等は、夫々自己の擴張であつて、之を無限大に且つ眞劍なる態度に於て擴張したるときに、神を悟らして頂く譯合である。

扱て兎に角人間は不思議乍らに生きてゐることを條件として次の三ツの場合がある

- ① 赤子の如く心と身體と不完全乍らも其働きのあつて生きてゐる
 - ② 大人となつて双方完全に備つて生きてゐる
 - ③ 病氣となつて何れか一方が不完全乍らに生きてゐる
- 右の不完全といふことは相對的のものであつて、其程度を嚴密にいひ現はすことは出來ないが、其程度が行き過ぎとなつた場合には、他の一方のみが成立することは不可能で、遂に死に到るのである。即ち肉體のみ生きることなれば、精神のみ生きてもゐられぬ。そこで死に行くときの状態は心と身體と、何れか一方の滅亡が、急激に來るか除々に來るか、同時に來るかである。例へば

- ① 双方が同時に來る場合
 - 一 刀兩斷に要部をやられたとき即死する
- ② 身體が急激に心が徐々に來る場合
 - 身體の要部を負傷して出血甚たしく貧血によつて漸次に意識を失ふ
- ③ 心が急激に身體が徐々に來る場合
 - 腦溢血や腦膜炎の如きとき心を先に失ふて遂に恢復せずして死する
- ④ 双方除々に來る場合

營養不良が長引いて勢力遂に盡きて死に到る

先づ右の様な四ツの場合を考へて見るに、人間が最后迄生きる力は何處にあるか、肉體にあらす精神にあらす、心臓の力である。醫者が最後迄手を盡して見るのは心臓の手當である。即ちカンフル注射で強心法をとるか、輸血をするか、食塩注射で血液を補給するか、何れてしても、心臓を働かせる方法をとる。故に心臓の働きを生きる力と見ねばならぬ。心臓の大切であることは、睡眠中でも心臓のみは休んでをらぬ。又胎兒は肉體的には完全でないけれども、心臓のみは完全に働いて居る。斯様に考へて見れば心臓の力は眞に生きる力である。一般に生命を精神と肉体の相關のものとして解してあるけれども、實際には其双方を超越したる心臓の力といふものがあつて、基本の生命力をなして居ることを知るのである。人体の構造は大体に於て左右對形であるが、心臓のみは只一つであつて、然かも左側に配置されて居る。即ち左側一心である。

それは只事實たるの外に何の理由もない。而して一心は一神で宇宙の神を表徴したるものの如くである。即ち心臓といふ形而下の肉片には超越したる意味はないかも知れぬ。即ち死後の心臓と生前のそれと構造の上にこれだけの相違があるか。只其働きの力こそは不思議の神力と見ねばならぬ。そうすれば心臓の力は人間の如何ともし難き靈以上のものである。宗教によつては靈主体從とされて居るけれども、此神力は自分

の力でなくて與へられたる外力と信するの外はない。人間は思惟の能力を持つて居る故自己の生命を自力とも考へるし、又他力とも考へるのであるが、心臓の力のみは自力だと簡単に片付けられない。言葉の流行には面白い處がある。もとは頭の良いといふ言葉を以て人間の優秀性の代名詞となしたが、今日では心臓の強いといふ言語が生れて來て人間の觀察を一步突き込んで來た。全く穿つた言である。頭がよくても心臓の弱い人間なれば生命力は發揮されぬ。多くの病が心臓が強く節制よろしきを得たならば、遂には病を克服することが出来る。健全なる精神は強健なる身体に宿るといふが、なる程眞實に相違ないけれども、然し一步を進めたならば、そこに神の守護を見落しては居ないか。そこで人間の極致は吾々の自由にならぬ神秘の力に依るものであつて心臓絶對と信せねばならぬ。人間本來健康のときは自分の身体に就て深く考へて居ないけれども、吾々近親の臨終に侍つて既に時間の問題とあきらめねばならぬ時、病者の苦悶を見守りつつ如何とも爲し難き時、吾々の腦裡に如何なる心理が働くか。醫者の注射の一本一本に大なる期待をかけてゐる。そこに超越せる力に依頼する氣持が充分にある。本人の頭腦も身体も何等自分の働きのない處に、辛ふして心臓の力のみが生命を維持してゐる。兎に角心臓の力は人間最初の力であり、又最終の力である。扱て耳目鼻舌身を人間の五官といひ、其感能に併せて頭腦の働きを第六感といふ。

そこで更に心臓の力の依つて來る處の神を信することを第七感とする。此第七感の確立が信仰の極致である。世間普通に信仰をつかむといふてゐるけれども、實は的中せぬ感がある。理窟から云へば神人融合が信仰であるけれども、摺むといへば手で摺むといつた様な氣持に關連して自力の作用を云ひ現はした様である。大聖偉人は神と同様の方であるが、吾々凡人の間では神の子たといふ觀念以上のものに取扱ひ難いのである。即ち神を父とし佛を母として、吾々は其慈愛のもとに生長させてゐると考へるとき、吾等の周囲に神佛の加護がある。今迄神佛があるかないかと疑つてゐたことが、神佛の中に圍繞抱擁されてゐることを悟つたとき、佛教でいへば信心であり、神道で云へば信仰である。摺むに非らず摺まれるのである。日本はもともと神の國であり、父方の姓を繼ぐのが不文の掟である故に、日々の活動の上には神の子を名乗つて出なければならぬ。昔戰場の武士はお互家系を名乗り合つて一騎打ちをなした。實に眞面目な眞剣な態度であつた。日本人は神の子たといふ信念のもとに眞剣な態度でありたいことである。そこで佛は、ほごける、ほごすの意、即ち疑を解くのが佛の教であるが、解けた儘であつてはならぬ。再び結んで行くのが神乍らの道で積極的實踐の道である。即ち日常生活に結び付いて行く様に不言實行を精神としたもので、理窟の少いものであり、總てが神の働きとして神話が生れたものと解する。斯くの如く神道は日本獨自

のもので、然も實踐が一致すれば他の宗教を排斥するものでないから、死んだときの各人の葬式は佛教によつてもよろしい。然し團體葬の場合には神式によることか日本的である。又結婚は神道によつて大いに積極的に幸先よく結ばねはならぬと思ふ。尙又病氣の克服でも經濟の克服でも大いに神の加護を信して神の子たるの自覺によつて日本精神を強調し、民族意識を明徴にして神國日本の永遠なる生命に合流して行かねはならぬ。然るに吾々の日常生活に於て第七感が薄弱であるから病氣になれば自分て之を治さむとあせる。自ら病を重くし病を創造する場合が多い。特に神經性の病に於て自己創造が多いとされてゐる。斯く生命は神の支配であつて自分の勝手にならぬ。然るに之に處する體度方法を過まつて遂に惜む可き生命も自ら捨てる場合がある。病氣は醫者の手を借りて尙神を信するの外はない。然り而して神は永遠なる民族の生命を與へ給ふ代りに個人の生命は自然死を以て新陳代謝を行はれるのである。先天的なる身體の欠陥で夭折しても、それは自然死で如何とも止むを得ぬ。然しそこに合理的な健康増進の努力を拂ふと共に第七感の信念を固持すればよい。身體は神と共に強壯なる可きものなれ共、心迷ふときは即ち身體の病となる。病に依つて心は益々迷ふて來る故に、病の時も健やかなる時も常に造化三神以下神々の守護を忘れてはならぬ。吾等の生命は一つの流れであつて靜的形體ではない。流動の

現象である。川に比すれば、そこに瀧あり瀬あり、淵あり淀みあり、變化其ものが生命である。先天的なる病氣、免れ難き危難は止むを得ずとしても元々生くる力があつて人間に生れ神の支配下にある以上、恰も天候の如く其流れの間には壯健もあれば、病氣もある。然し其變化には常に生命軌道を脱せざる様、神の節理があつて健康維持の力が常に働いてゐる。一旦病氣と經濟とに行き詰つた結果そこに一つの悟りを開き心の平靜を得て健康を回復した例が多々ある。之神の節理である。即ち人間が病氣によつて身体を破壊してゆくのを神は一々修理し乍ら働かしめ給ふと考へたらよい。感謝なき不節制、不合理なる手當によつて修繕が效かぬ様に破壊したならば遂には神も御用濟となされるものと考へたらよい。

扱て以上の思惟を凝念したる后、再び宇宙の現象に立ち返つて見る。

天體のものは今日の如き星の世界となる以前に星雲時代に始つたと推理される。即ち非常なる高熱瓦斯の立ちこめた一つの空間であつた故に、物の形といふものは全然なかつた。鐵でも金でも非常なる高温に熱すれば氣體に變化してしもふ。それが更に極に達すれば電子といふものになり、形がなくなつて光の要素となるのである。故に宇宙はもと光の世界で神の靈のみであつたと考へられる。今日では物の形として吾等の周囲にあらはれてゐるけれ共、かく其極致を考ふれば、有形が實在か無形が實在

か、何れともわからぬ。然し今日の人間にとつては有形を實在とすることが便利である。そこでもともとの宇宙は光のみの世界であつたと想像する。やがて光の中から物が現はれて來た。即ち熱の冷却である。其冷却といふことが有形となつたのであるから光が物に變化したものと解する。即ち光と物と其實質は別なものでない。今日太陽の光を受けされは生物が生長し得ないのは、太陽から生長の原素を仰いでゐる爲めである。然るに此自然現象の眞理に對して日常の認識に誤りがある。人間は自分といふものを宇宙の根元として人間の力を發揮せむとする。そこに科學の進歩あり、思想の發達もあり結構なことであるけれ共、人間が山岳を征服したり宇宙を征服すると考へたら、宇宙は物質のみの固まりと見做されてしまふ。そこに唯物論が起り曳いては物質主義や個人主義が都合よき様になり不自然なる行動に捉はれてゆく。然し乍ら光と物とは宇宙の兩面であつて、光がなければ物の存在がわからない。又光は物が反射することによつてのみ其存在が認められる。されは兩者は不可分の性質のものにして、相互的である故に、光の中に光の價值といふものはない。又暗黒の中に物の價值といふものも見出せない。自働車のヘッドライトは夜間驅走するとき大邊便利な價值あるものであるが、晝間用ひても無駄である。突然トネルに入つたときライトを點しても路面がよく見えないで、中が眞暗の處で稍々見えるようになる。其絶對光力に於て

は數字的に異なる筈はないけれども、夜間は充分の價值あり晝間は全くない。又夜間手探りに自働車を走らせるといふことも出來ぬ。即ち物に光を受けることによつて、そこに始めて價值が生じてくる。そこで天に光あり、地に物があつて、光明が物質を照らす處に意義あらしめてゐる。心の世界に於ても同一の理であつて高天原と根の國とは心の世界の兩面である。根の國の情實を翻すことによつて、高天原を拜むことができ。そこで高天原は光明世界であり、神の國である。そこに始めて幸福があり、物の價值が生れてくる。而して其價值其幸福を知るのが人間である故に、人間が此地上に居ないものとしたならば、此世の中には光明世界があるふと無かるふと、關せざる處であるが、只かくの如く人間が光明世界と暗黒世界の中間に介在し、常に上界と下界に出入して反省して行く處に意義あらしめて來る。斯くその元が同一であるものの兩面關係を相對的と云ひ、其大本の本質にあらせられる神が天御中主神である。即ちあらゆる相對の上超越されたる宇宙の絶對神にまします。そこで御中主神より宇宙の相對が生れて來るので、次の様な解釋を導いてくる。

(光明世界) 高天原 神の國 善の國 健康の國

(暗黒世界) 根の國 鬼の國 惡の國 病氣の國

人間世界は其中間に挿まつて居るから中ツ國と云ふ。此三つの世界が天地人である。

天地人一体となることが信仰の極致にして、中ツ國が圓滿に行つたならば理想の國が出現する。人間が物の世界に拘泥してしまつたのでは根の國の苦悶に陥る。又高天原に昇天してしまつては、日常生活に用がなくなる。そこで神の國から再び人間世界に立ち戻つて日常生活の上に反映してゆくことが惟神の道實踐の生活である。

日本神話で諸神は禊によつて三神を生み給ひ、夫々の統治を定め給ふたのが、所謂天地人の三界である。そこで宇宙の天地に人間が介在することによつて、相對の世界となり、高天原に 天照大神がまします。そして常に人間世界を導いて頂くのであつて日本人にとつて最高主宰の神であらせられ、その御靈は皇統の本質をなして神國の輝きのもことなり給ふて居るのである。

さて善惡觀も同様に相對的のもので、善惡個々に成立つものでない。故に箇條書きにした善惡と云ふものはない。その場合場合によつて其時の事情が決定する。人を殺すことは大惡である。然し戰爭で敵を倒すことは差支へない。戰功を立つれば大に國家の行賞に預る處である。しかし降伏した者は又弑す譯にゆかぬ。かく色々の事情で違ふてくる。同様の理で宗教の形式も其精神の添ふたものでなければ、何もかも絶對のものとして只に其型式のみに捉はれるとき、似て非なる信仰に陥つて、僞安心、僞信仰を奉ることがあるであらふ。

次に健康の事も一定したものでなく、自ら病氣と自認すれば他人には同程度で、病氣ではない状態でも自分は病になつてしまふ。其潜在意識の支配する力は非常に強いものである。慢性といふのは大抵自己の格付けとされて居る。神は慢性の儘にして置かすに治癒の力を與へられて居る。自ら氣に病むこと其ことが假裝慢性たることがある。宇宙の原則は一つの力が加はれば運動を起す。しかし其運動に對して常に抵抗が働く爲めに其運動を失ふてゆく。之を惰性といふ。此力が身體に於る健康であり、惰性が病氣である。神は常に力を加へて健康を與へ、人間は常に抵抗を加へて運動を阻止してゐる。故に神を信すれば壯健となり、物質に執着すれば、健康を失ふ。然し本當の信仰といふものは至難のもので、型許りを真似ても、自分の反對信念が逆に毀してゆくから一概にゆかぬ。體驗による可きもので言外の理がある。

以上の様に善惡、美醜、喜悲、苦樂の如き相對的のものには總へて一定の規準なく、主觀と客觀とによつて相違することが多い。卑近な例をこれに、○酒なくて何の己れが櫻かな、○鳥の將に死せむとするや其聲かなし、○明月や座頭の妻の泣く夜かな
○好いた人ならアバタもエクボ、チンバ曳く子が舞ふて來る。と云つた様なことは人間の主觀の上に成り立つことで、必ずしも客觀と一致したものではない。斯くの如く自分の想像や願望を以て、強いて不可能を可能ならしめむと、執著することを煩悶と

いふ。煩悶は迷信の世界、根の國である。病氣や善惡觀には特に此迷が多い。正しき觀察は主觀と客觀と一致す可きことで、之を事實といふ。そこに確質性あり永遠性がある。即ち(事實即真理)なのである。真理は正しき信仰によりてのみ認め得られる處であるから、正しき生活のためには正しき信仰が必要なる所以である。

兎に角人間が生れて來たことは神の御用を遂行するためであつて、自分一個の幸福のためでないことが窺はれる。自分の幸福のみを追ひ廻つても、最後は一切を精算されてしもふ。我利主義はそこに手段と結果が合致せぬ。身を修め家を治め而して國家に奉公することが神乍らなる掟であることを窺ひ知るのである。其上の理想は世界の平和であるけれども、自國の安泰を期した上でなければ、手段を過まる。國家の幸福と一致した幸福が眞の幸福である。同様に個人も國家の生命に合流したものでなければならぬ。尙常に經驗する處は、人が死んだとき誰しも惜まれぬ者はない。其惜まれる同情は其關與する周囲の廣さにより各々相違するけれども、とにかく其人が尙生存して、世のため人のためになる將來を惜まれるのである。死人に口なしで死んで何等の要求はないに決つたことであるが、只其周囲から生存を要望されることが即ち我等の生命が自分のためではなくて、人の爲めに意義あることを證明してゐる。されば我々は人のため國のために働くのたといふ自覺を持つとき生き甲斐がある。よつて

神の子として神の心に添ふ可く、國家に自己を捧げることが、人間本來の務めであり、其務めを完ふする處に周囲の恩寵も益々大なる所以と悟らして貰ふ。

次に高天原と根の國の中間にある中ッ國に特異の事情がある。人間は經驗を集積して之を整頓應用することによつて思想を持つ。更に言葉を使ふ事により其思想を益々豊富ならしめる。此思想する力が他の動物と異つた點で、萬物の靈長たる所以を發揮する。此言葉は即ち神の(ことば)なのである。言語としてのことばは、昔と今日とに變遷がある。又世界の各國によつて相違してゐるけれども、何れも言葉によつて相互に思想の交換贈與をなしてゐる點に於ては同一である。即ち言葉を使用する力そのものに就ては神の與へ給ふ處である。此能力の應用から身振り手振り乃至記號や文字が發達したものである。故に言葉は人間の發明ではない。神と共に存在したものである。故に子供は教へることよりも悟る力によつて知つて行く。教育は教へることに非ずして導くことである。此能力がある故に盲目、聾啞、何れも完全に悟つてゆく。即ちことばの力によつて人智が開けてゆく。同様に智仁勇の三徳もことばによつて伸展する故に、之を修養練磨して愈々完全ならしめねばならぬ。そこに教育の必要がある。

次にことばは神の賜であり、其内容は(まこと)である。宇宙の現象は眞理の表現であるが、(ことば)は(まこと)の表現であつて、眞實、眞理、眞心といった様なものを總稱し

たもので、眞善美の揃ふたものである。神は誠を實踐せしめるために言葉を與へ給ふてゐる。故に神は(ことば)であり又(まこと)である。而して誠(まこと)の世界が高天原であつて、天照大神の素神と誓はれたる五道三徳はことばの實踐的方面として人間生れ乍らに制約されてゐることを伺ふ次第である。我等は宇宙の諸神を信すると共に其使命を遂行する上に精神の修養が大切である。日本神祖の御遺訓と共に大聖偉人を鑑とせねばならぬ。而して我等の祖先は此日本の國土にあつて永年の傳統の中に神話を完成せられたのであつて、日本の天地自然が神の御心を表現して其最初の教となつたものであるから、地理的環境と民族生活の様式とは大切なものである。

惟神の道を現代日本人が實踐する上には、是を地上に求めねばならぬ。そこに神社あり靈跡あり、是を彌々日本人が崇敬する處に惟神の道が日本國土に充實するのであつて、祭政一致は正に是を表徴する處と信する。

要約するに、宇宙は道德的向上の一途を進みつつあり、人間が是をさとるとき、そこに神の信仰が生れてくる。而して信仰生活とは自分の周圍をして尤も多く價值附けることに飯するのであつて、周圍と共に生きることが正しき生活であり、日本と共に生きてゆくのが最大の幸福である。

附 日本精神とは何ぞ

四四

今日、日本精神といふことばを聞き、其説明の如く、當にかくありたいと思ふ半面に何たか徹底せざるものの如く、隔てを感じるのである。斯くの如き場合、日本精神が付け焼き刃であつて、自分のものになりきらないからである。故に日本精神を自分のものとして自分の身体が日本精神の鹽漬けとなり、その精神に染めあけられねばならぬけれ共、其爲めにはそれが染まる丈けの素地に仕直さねばならぬ。日本人にして染み得ない筈はないが、一度西洋文化の弊たる唯物主義のテンブラとなれば、油を抜きさらねは容易でなう。この油を抜く方法が正しき自己の内省であつて、日本歴史の源を知ると共に民族意識の確立をなし、同時に神國實在の確認に皈著する事と思ふ。

吾人の日常に事物に對する觀察は多くは靜的であつて、其觀念が動的に迄徹底せざる如くである。即ち物その物を唯物的に見るのみにて、物の動き即ち其生命を見逃して居る様である。此靜的に見る事は今日迄の科學の教へたる處であるが、更に一步を進め相對性原理に基き第四元的に見るとき、實在は現象である事がわかる。總て物は點線面或は長廣厚の三元より成立つて居る。けれ共宇宙は四次的に時間の要素を以て動いて居る。時間は即ち變化であつて、變化の中に事實を認識するのである。

宇宙は空間的には無限大の形相を以て無始より無終迄絶えざる變化である。是を宇宙の活動といふ。活動は宇宙の生命であつて是を靈的に見る時、神の存在である。人間は小宇宙であり、宇宙の生命を分けたる神の分身である。茲に線香の火を以て輪を画くとき其迴轉によつて火の輪を見る。輪は吾人の目に映する實形であつて瞬間的の火の一點は想像に止まる。又一つの山を見るに遠近を比較して大きさがわかり、之を單なる平面画に押し潰しても左右を比較せねば廣さが解らぬ。かく三元的に見得るようなものでも既に時間の要素を含んだものであるから、瞬間的の實体は見る事が出来ないで、常に動いて居るもののみが見られる。故に宇宙の實在を考へたとき、動いて居るもののみが有形として認められ、無形のもの靜止せるものは存在せぬ。恰も立体画の活動寫眞を見て居るようなもので、實在であり乍ら投影である。

斯くの如く觀察の地點は一步を進めて見る可きである。人間が自分の立場から自己を見るとき夫は自分ではない。即ち神を通して見るとき始めてわかる可きもので、衡器に依らねは自己の体重が認め難きに似たものである。茲に實在の零も、亦無限大も認むることは出来ぬ。夫は想像に止まる事である。今事物の零を想像するとき輕侮を感じ無限大を思ふとき脅威を感じるのが心の働らきである。人間が宇宙の一部分として自己を反省するとき其微力を知り、宇宙の偉大を想像するとき神の靈力が感受される。

四五

即ち神の存在は對立的のものでなく吾人の理想信仰で、内省によつて得る處の第七感である。されは神は現在の靈力であり、將來に其思惟を推し進めるとき愈々敬神の念を深ふするものである。

さて宇宙の活動を手近く考ふるに、川の流れを想像する如くである。川は水の流れであつて寸時も停滯することなく動いて居る。瞬間の姿を想像して靜止するものとすれば一つの長い水の塊まりで氷山に等しいものである。然れ共實在する川は水の活動であつて、其源より次ぎ次ぎに湧き出づる水の勢力を連續したものである。其水源に於ては吾々の感ずる處微少なれ共、一度狂瀾怒濤をなす激流を見れば龍神の荒れ狂ふにも似て、只恐怖の感に打たれるのみである。鐵砲の彈は掌中に乘せて見たとき玩具の破片にも思はないけれ共、鐵砲の筒口より飛出す彈丸に對しては恐怖其ままとなるのである。之即ち吾々日常に感ずる處がもの活動力に支配されることである。

斯くの如く川は形ではなくして永遠の活動である。全様に人間より見る可き神は活動であつて、姿其ものではない。さて吾々日常の生活は是を川に例ふれば、河川の中の一掬の水に相當するものであつて、源より出て相互に隣り合ひ隔つる處なく流れゆき中流に動いて居る。而して再び元の源に立ち返つて、流れ直す事は不可能であるから行く處迄ゆかねはならぬ。そして自分一個としての生命は川の盡きる處に於て、無く

なるのである。之人間の自然死である。然し川の生命は後より進み來る處の水によつて惟然として自然の儘である。川の流れの進むに従つて水量を増し下流に於ては大船を浮へ魚を養ひ水草を育くむ愛撫の働きをなして、やがては仁慈無邊の大海に抱擁される。即ち神國日本を守りつつある處の日本民族の發展は大河の如く、宇宙の神の理想信仰に導かれつつある。吾々は民族の一分子として五十年の生を受け、生きる儘に活動せねならぬ。けれ共吾々個々の立場を忘れてはならぬ。一掬の水は甲の川より乙の川に居處を替へる事の出來ない如く、吾々は日本民族の流れから一步も踏み出す事は出來ない。而して日本民族の理想信仰を其儘奉載してゆかねはならぬ。各自勝手な理想を摸倣して見ても、其は思想の遊技として事實に添はぬ迷想となるのみである。故に個人の修養といふ事も民族意識に歸一せされは價値なき事である。

滿州國の建設は日本民族發展の姿である。各人個々の集合ではない。其集合に祖國精神を打ち込んで全一となつた處が四元的活動体である。滿州に活躍せる人は日本を有難く懐し、思ひ、同時に日本の將來を思ふ事切なりと言はれる。是神國独自の民族精神に外ならぬ。今や日支の平和破れて一大非常時となつた。軍人は夫々戰場に、日本を脊負ふて護國の神となつて居る。銃後の民は期せずして舉國一致の應援をなして居る實にうるはしき神國の姿である。神國日本の生命は正に日本精神であり、民族の信仰

である。此信仰は平和にあつても弛みなく、愈々堅持されねはならぬ。日本精神が各
個の思想に止まつてはならぬ。

昭和十二年九月二十日印刷
昭和十二年九月廿五日發行

發行者 宮崎縣高千穂町大字三田井 甲 斐 勝 美

印刷者 宮崎縣延岡市高千穂通二丁目 甲 斐 せ つ

印刷所 宮崎縣延岡市高千穂通二丁目 星 印刷所

終

